

<p>1. 単元名（活動名） A Closer Examination of the Multiple Perspective of WW 「日米中高生と一緒に戦争と平和を考えるプロジェクト： 第二次世界大戦について複数の見方から考えよう！」</p>	
<p>2. 対象：中学校～大学生 2005年同志社中学校（参加生徒21名、指導者：中山京子・織田雪江教諭ほか） 2006・2007年京都ノートルダム女子大学（参加生徒20名、指導者：中山京子） ネブラスカ州オマハのオマハブライアン高等学校（参加生徒40名、指導者：Melissa Gate）、 カリフォルニア州ロスアンゼルスローズミドル中学校（参加生徒20名、指導者：Alison Muller）</p>	
<p>3. 教科領域との関連性：社会科、歴史、アメリカ研究 この単元は日本の社会科学学習指導要領、アメリカのナショナルスタンダードに準拠している。 日米の双方において、第二次世界大戦に関連する出来事を学ぶことが示されている。</p>	
<p>4. 実施時期： 10月 日米メーリングチームの名簿作成 11月～12月 5～7回のメール交換</p>	<p>5. 総時数： 5～7回のメール交換と事前事後学習を含む時数</p>
<p>6. 単元（活動）目標： 真珠湾や第二次世界大戦に関して多様な見方で考えることが真珠湾や第二次世界大戦に関して多様な見方で考えることができる。 <u>主な問い</u>： ・どのような出来事が真珠湾攻撃につながったのか。 ・日本人とアメリカ人はどのように第二次世界大戦をみているか。 ・第二次世界大戦に関連した出来事が、どのように異なって見えるか。</p>	<p>7. キーワード 真珠湾攻撃 原爆投下 博物館展示 日系人強制収容 児童図書を活用 体験的共同学習</p>
<p>8. 単元について（教材観・単元設定の理由・国際理解教育の視点など） 2005年のワークショップにおいて日米38人の教師がディスカッションを重ねる中で、少しずつ共同単元開発・実践へのキーワードや興味の重なり、実現の可能性が見えてきた。参加者のそれぞれが、大切にしたいことや実践実現の具体的な方法を提案することを通して、グループを組織した。教材としての「真珠湾」は多様な見方から学習を追究することができる要素をもっている。<図1>中山は児童図書活用に興味があるアメリカ人教師二人とグループを組み、プロジェクトを立ち上げることにした。 グループでは、「日本による真珠湾攻撃」「アメリカによる原爆投下」「戦争を伝える博物館展示」「日系人強制収容」「児童図書の活用」「体験的共同学習」などのキーワードをもとに、「真珠湾」と「広島」の記憶をめぐる共同単元開発を行った。それをもとに日米で同時に実践し、日米三カ所の生徒同士がメールで意見交換をしながら学ぶプロジェクトを立ちあげた。2005年は同志社中学校の織田教諭の協力を得て実践、2006年・2007年はロスの中学校、オマハの高校、京都の大学のと三校でメールプロジェクトを実施している。<図2></p>	
<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 45%;"> <p><図1>「真珠湾」教材がもつMultiple Perspective</p> </div> <div style="width: 45%;"> <p><図2>三校メール交換グループ</p> </div> </div>	
<p>9. 展開計画・展開記録</p>	

次/時	主な学習活動と子ども（学習者）の意識	留意点
	<p>単元概要：真珠湾で起こった事、日系人強制収容、広島についてアメリカと日本の視点から追究する。この活動は、読書、ドキュメンタリー、アクティビティを活用する。</p> <p>活動1 ・自己紹介のメールを送る。 ・ 真珠湾攻撃、日系人の強制収容、広島原爆投下について興味あるテーマを選択して調べる。調べたことに関する自分の意見をメール交換をする。</p> <p>活動2 ・アリゾナ記念館編ドキュメンタリービデオ『真珠湾の回顧録』を見て、メールを交換する。 ・ 活動5のためにヨシコ・ウチダ著『トパーズへの旅』、グレアム・ソールズベリー著『その時ぼくはパール・ハーバーにいた』（アメリカはこの2冊の他、ヨシコ・ウチダ著『Farewell to Manzanar』も追加）のどちらかを選ぶ。</p> <p>活動3 ・小グループをつくり家族とみため、強制収容所に何をもって行くか、当時の日系人の緊迫した環境に身をおいて持ち物のリストをつくる。 ・ 活動の感想にリストを添付してメール交換をする。</p> <p>活動4 ・アリゾナ記念館や広島平和記念館のホームページがどのような視点で構成されているかについて研究をする。 ・ 感想をメール交換する。</p> <p>活動5 ・2で選んだ本の短い読書感想文かその本にふさわしいブックカバーを描き、メール交換をする。</p>	<p>日米三校の生徒が三人で1グループを構成し、一人の生徒が二校の二人の生徒に同時にメールを送る形でメール交換を行う。簡単なシステムであるが、日米約60人の生徒がこのシステムを理解し、正しく相手のメールアドレスを入力し、相互にコミュニケーションがとれるようになるまでには相当の時間がかかる。</p> <p>このプロジェクトのコミュニケーションはすべて英語であるため、生徒は日本語ならば豊富な語彙で表現できるが、英文にすることにより平易で短い文でのメール発信しができず、英訳への支援がかなり必要である。</p>
<p>10. 評価：</p>	<p>生徒の学びの深まりの段階も様々であった。その段階を以下の4つのレベルに整理して評価を行った。</p> <p>レベル1 日米の生徒で同じ学習活動をする事、メールで交信をすることを喜ぶ。</p> <p>レベル2 学習活動テーマにそって学び、自分の考えを発信する。</p> <p>レベル3 自分の考えを発信し、相手からのメールを受信して相手の考えも理解する。</p> <p>レベル4 相手の考えをふまえて、自分の意見を返すことができる。</p> <p>まず、相手からメールを受信した生徒はどの生徒もレベル1に立った。多様な見方ができるようになるのは、レベル3からである。日本側の生徒はメール交換が展開できなかった1名の生徒を除き、ほとんどがレベル3まで進む事が出来た。活動が進んでも、意見交流をする相手とのコミュニケーションが十分に出来なければレベル4には進めない。ここには言葉の問題とメールの送受信の成立の他に、生徒自身の根気や真摯な態度、教師の支援のあり方が影響した。子どもたちの学習の深まりを見ていると、学習活動が1から5へと進むと同時に、メール交換が確実に成立し、やりとりできたグループの方が、言葉の壁を乗り越えてレベル4まで達している。</p>	
<p>11. 苦労した点</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学習時期を3校で調整すること ・ 日本の生徒にとっての英語の壁をのりこえること ・ コンピュートースキルの個人差への支援 ・ メール交換が精一杯で、その結果を学級内で共有することが不十分になる 	<p>12. 改善するとしたら</p> <p>3年間プロジェクトを継続する中ですでにいくつか改善を行ってきた。大きな改善は活動ごとにワークシートを用意したことである。これにより、生徒同士が相手の考えや活動状況を同じコンディションで理解することができ、交流が深まっている。</p>

13. 授業づくりのための参考資料

- ・小藤田千栄子「ハリウッドが描いてきた『真珠湾』」『潮』510巻、280-285頁、潮出版社、2001年
- ・賀川真理「真珠湾攻撃とヒロシマ・原爆投下をめぐる日米間の感情的しこり」阪南大学学会『阪南論集社会科学編』35巻、2000年。
- ・多文化社会米国理解教育研究会編『多文化社会アメリカを授業する・構築主義的授業づくりの試み』2005年。
- ・Christine I. Bennett, *Comprehensive Multicultural Education: Theory and Practice*, 4th ed., Allyn and Bacon, 1999, p.29. この単元案については、森茂岳雄編『多文化社会アメリカにおける国民統合と日系人学習』明石書店、1999年、24～26頁に詳しい。
- ・John Kornfeld, *Using Fiction to Teach History: multicultural and Global Perspectives of World War*, Notional Council for the Social Studies, *Social Education*, 58-5, 1994, pp.281-296.
- ・中山京子「日系人学習における児童図書の活用—多文化教育の視点から」森茂岳雄編『多文化社会アメリカにおける国民統合と日系人学習』明石書店、1999年、117～138頁参照。

14. 学びの軌跡（感想文、作品、ノートなど）

・プロジェクトに参加する前は私にとって真珠湾攻撃は日本がアメリカと戦争を始めた日だとしか思っていなかった。活動の中で、多くのアメリカ人が亡くなった事を知った。アリゾナメモリアルホームページには、日米両方にとっての真珠湾も学べるようになっていた。小学校のころから毎年戦争についていろいろ学んできたとおもっていたが、とんだ思い違いで、自分は何も知らなかったのだとわかった。学びすぎということはないと思うから、これからも機会があれば戦争について学習をしていきたい。また、一つの事を違う方向から見ている人と意見を交換する楽しさを知った。いろんな人の意見を聞くのは本当に大切だと思った。(Natsumi)

The things that shocked me the most are the different amount of people that died. Another thing that shocked me the most was the survivors. The Arizona memorial focused on solders. Japanese memorial focused on civilians. The Arizona memorial is built around the Arizona. The reason why it is built on a boat is because this is the final resting place for those who served on the Arizona. The Hiroshima memorial is built to remember civilians that are why it is so big, The Japanese one is bigger because the we bombed a city.(Ibelia)

I think that the memorials are set up the way they are because that's probably the way they were meant to be. So the people can look at the history as it may had happened. Maybe to remember all those lost in the Arizona who fought and names are engraved in the shrine room. As I was looking at the pictures in the internment I was like "Wow". I can't believe all of this mess was created. I just think it was sad that a lot of innocent people died. I feel sad for those whose family members died, sometimes mad that they weren't adults enough to talk about their problems. (Olga)

15. 備考（授業者による自由記述）

「相互理解」学習と呼べる実践が少ない中で、本プロジェクトにおいては、二カ国間で教師が共同で単元開発を行い、同時期に実践を行い、生徒同士がメールを通してコミュニケーションをとることで、相互理解学習としての深まりがあった。二カ国間の相互理解が図れたことで、教材そのものがもつ多様性に加え、学習者の多様な視点も単元や学びに反映させることができた。実践が生まれた日米教師合同ワークショップの開催意義は大きい。戦争にまつわる「記憶」をテーマにしたワークショップであったことから、実践には「記憶」をどう記録して伝えるかという視点から日米二つの記念館のホームページの分析の活動や、個々人の記憶に残る物語に生徒が近づけるように児童図書の活用などを試みた。生徒自身は学習活動から新しい知識を獲得し、学習活動をこなすことにおわれ、「歴史的事象をめぐる記憶」そのもののあり方には十分には迫れなかったものの、多様な視点から一つの事項を研究する過程を通して、「記憶」そのものへの迫り方を体験することができたのではないかと考える。